

## 令和3年度 津山市地域創生推進会議（社会環境分科会）

### 議事概要

---

#### 【開催要領】

- 1 開催日時：令和3年10月22日（金）13：00～14：30
- 2 場 所：津山市役所 2階 第1委員会室
- 3 出席者：

会 長	中村 良平	岡山大学大学院特任教授
委 員	光井 俊之	美作大学事務局次長
委 員	横谷 正明	津山工業高等専門学校教授
委 員	村上 泰司	津山公共職業安定所次長
委 員	角田 直樹	岡山県美作県民局局长
委 員	片田 恭裕	公募
委 員	角野 泉	こども居場所アドバイザー 兼放課後児童クラブ連絡協議会副会長
委 員	小川 早苗	保育協議会副会長
委 員	長江 真理子	社会教育委員長、地域学校協働活動推進員委員長
委 員	植山 起佐子	岡山県スクールカウンセラー

（欠席）

委 員	前川 竜宏	連合岡山北部地域協議会 議長
-----	-------	----------------

---

#### 【議事次第】

- 1 開 会
- 2 委嘱状交付
- 3 市長あいさつ
- 4 会長あいさつ
- 5 協議事項
  - （1）第2期「津山市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の改訂について【資料1】
  - （2）第2期「津山市まち・ひと・しごと創生総合戦略」実績報告について  
【資料2、3-1、3-2】
- 6 そ の 他

---

#### 【概要】

- 1 開会
- 2 委嘱状交付
- 3 市長あいさつ  
（市長）

本日は、津山市 地域創生 推進会議を開催しましたところ、ご多忙の折にもかかわらず、ご出席を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、本市におきましては、令和2年2月に令和6年度末を計画期間とする「第2期 津山市 まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、地域創生と人口減少の克服に向け、各

種施策を進めているところです。

また、新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえ、国においては、新たな地方創生の実現に向け今後の政策の方向性を打ち出すため、昨年12月に第2期「まち・ひと・仕事創生総合戦略」の改訂が行われ、本市においても、感染症拡大に伴う社会情勢やひと・しごとの流れの変化を踏まえた改訂を今年3月に行ったところです。

本年度からは、総合戦略の推進に関係する各分野の皆様との連携を強化するため、本会議を経済分科会と社会環境分科会に分けて開催することとしており、経済分科会においては今年7月21日に開催させていただいております。本日は社会環境分科会ということで、第2期における令和2年度の実績報告などが主なものとなっております。

委員の皆様におかれましては、各議題につきまして、それぞれのお立場から、忌憚のないご意見・ご提言をいただきますようお願い申し上げます。

結びに、人口減少を克服し、本市の創生を着実に進めるため、引き続き、皆様のお力添えを賜りますよう重ねてお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

#### 4 会長あいさつ

(会長)

ちょうど選挙まただ中で、今回の総選挙は、2014年の時に言われた地方創生とか地域創生があまり公の場にあがってこない。コロナもあるということで、分配の仕方が沢山あります。バラマキとしてコロナ交付金を出せという経済面からするととんでもない話。

さすがに地方誌の山陽新聞は、候補者に地方創生の事について意見を聞いている感じだが、目新しい展開や意見、方策があまりないようだ。

今回は、今までの経過をこの会議で評価していただき、みなさんの厳しいお立場で厳しく評価いただきもっと良い施策に結びつけるように議論していきたいと思う。よろしく願います。

#### 5 協議事項

(1) 第2期「津山市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の改訂について【資料1】

(2) 第2期「津山市まち・ひと・しごと創生総合戦略」実績報告について

【資料2、3-1、3-2】

～事務局より資料説明～

会 長： 委員の皆さんにいろんな分野からの御意見や御質問を賜りたいと思う。特に今回は基本目標のⅢの「若い世代を中心にして結婚・出産・子育ての希望がかなうまちを実現する。」を鑑みて新しい委員の方にも加わっていただいているので、その辺りも含めて、専門的なご意見やご質問を頂きたい。

委 員： 私の専門は、こどもの育ちで、子育ての基本のところになりその点についてこのプランを拝見した。その中で基本的に手薄ではないかと思われるところをお尋ねしようと思い資料を作成してきた。

その図は、基本的なことで、子供の発達、人の発達を考えるとときに、このような図を持って考える。世代間連鎖というものがあり、私は主に、小・中・高と子供たちの生きづらさの問題に関わっている。その時に世代間連鎖の分岐点として

思春期・青年期が非常に課題になってくる。そこが、若い世代を呼び込む時の基本と繋がってくるのではないかと考えているので、その部分について意見を言わせて頂きたい。

婚活のマッチング等ということもあったが、若い世代で今後人口増を狙うとすれば、子育て世代の人たちが転入して来てくださるのが、効果的ではないかと考えている。子育て世代の人たちが転入を目指される時に何を見るかということ、子供の育てやすさだと思う。

この世代間連鎖の分岐点として思春期・青年期をどう考えるかだが、それ以前の段階については、他の委員の方がお詳しいと思うので、そこはお任せするが、思春期を迎えるといわゆるアイデンティティ形成をして自分がどう生きるかということを決定する。その時、家庭を持って、子供を産み育てるということを考えるとどこが住みやすいかということになる。この部分についての施策を手厚くすると転入者が増えるのではないかとというふうに考える。ちょうど転換点に当たる思春期・青年期の人たちへのサポートが非常に手薄になっていると臨床経験から考えている。そのあたりを子育ての中に盛り込んでいただけるとよいのではないかと考える。

特に、私の専門としているところで義務教育終了後の若者たちのサポートが非常に手薄だと考えている。ここで、ドロップアウトすると次世代育成に関われないというか、家庭が築けなかったり、就労できなかったりということがあるので、ぜひこの義務教育終了の段階で生きづらさを抱えたままにしない、次の世代に繋がるような施策を打っていただきたい。

現状としては、津山市は県内でも大変早い時期に、こども若者育成支援推進法に基づく、津山市こども若者支援地域協議会を設置しているので、そこで調整機関を担っている青少年育成センターがサポートしているところだが、残念ながらここは十分機能できていないということがある。この点について検討いただきたい。

その後参考文献としてあげているのは、生きづらさの逆、生き心地のいい町はどんな町だろうということを考えてときに、この参考文献が役に立つのではないかと考えて提示させてもらった。

もう一点、市内の様々な相談窓口の相談員さんたちと勉強会をすることがあり、この点についてもお伝えしたい。子育てに関する相談、児童虐待の相談、DV被害、障害や高齢者の介護に関する相談、生活困窮に関する相談等の相談窓口、ファーストコンタクトをする窓口ですが、ここにおられる担当者がほとんど非常勤職の方となっている。そうすると、非常に難しい事例を扱うときに専門性の積み上げができていないと対応が困難だということを痛感している。この部分にも施策を打って、困難を抱えていてもそこからうまくリカバリーできるような安心感のある町になると、転入者が増えるのではないかと考える。

会 長： 多くの自治体は、人件費削減がこういったところが非常勤の方に依存する自治体が多くて、そうすると常勤じゃないとできないことが出てくるので、こういったことが重要であれば検討して頂ければと思う。具体的に施策に盛り込んで頂きたい。

委員： 私は、学童保育の指導員を26年している。その関係上、10年前から発達障害の子供たちの学習支援を支えようということでNPO法人オレンジハートを立ち上げた。実際はNPO法人オレンジハートは、発達障害の子どもたちの学習支援のみならず、不登校の子供さんの相談、それから子育ての相談、貧困問題、フードバンク、食品ロス削減、そういった関係の様々な物を社会の課題とともに子供の現状と課題をみなさんとお伝えしながら今10年に至っている。子供食堂も順調に行っているが、今では、こども食堂のお弁当を毎月50食作っている。そういったもののすべてが、ボランティアでやっている。

そういった中で、子供の貧困の問題は、今のこの時代に大切な課題ではないかと思っている。その中でも特に、ひとり親家庭への支援がどのように支えられているのかなということを見ると、私は学童保育の現場にいて、津山市の中ではひとり親家庭の負担金の補助はない。全国的には、今全国学童連携会副会長という立場にありまして、そちらの数字は、約8割は市町村の努力目標で補助している。

しかし、その2割の中に残念ながら津山市は入っている。ひとり親家庭の方は働かないと生活は成り立たない。

先ほどから子育ての課題が他の委員の方からお伝えされていたが、子育てしやすい環境に、また都会に出ていたけれども離婚して地元に戻ってきても、地元の家族おじいちゃんおばあちゃんと生活しているならばある程度の支えがあるかもしれないが、地元に戻ってきて生活しようと思ったときに何も頼るところが無かったとき、そういった支援が無かったら、学童にも入れることもできなくお母さんは働かなくてはいけない。そんな現状が今あることをみなさんにお伝えし、そのような支援をぜひお願いしたい。

会長： どうもありがとうございました。何かございますか。

委員： 私は、NPO法人の「みる・あそぶ・そだつ津山子ども広場」ということで、子供・文化・地域ということをいつも心に留めて活動している。それと、学校の地域学校共同活動のコーディネーターとして発足当時から関わったりしている。子供がいきいき活動していくには、どういう環境が必要かということを中心に考えて動いているが、子供には遊びが必要ということもいつも思っている。自然の中で自由に心置きなく遊ぶという環境が整っていないと心の発達などその辺が学校教育に中でも乱れ、学校現場では先生たちの大きな課題になっているのではないかなと思う。

それで、津山を好きになるとか、どうしたら帰ってくるかということ考えたときに、地域の行事への参加があるかないかでいうと、津山市には結構あるが、子供会時代には結構ある。中学校・高校になるとそこがプツッと切れて、やはり中学生・高校生の地域への参加貢献度ということをやうまく考えた地域でありたいなということで地域力の向上がどういう施策を行ったら図れるのかということがあると思う。頑張っている地域の子がいっぱいいるが、そこに津山市がいかになんか施策をもってくるのが課題とを感じる。

会長： 他にご意見は。どうぞ。

委員： 私は津山市保育協議会で副会長をしており、保育園の園長をしている子供たちの事も出ていたが、若い世代の方で子供さんを預けられる方が多く、育休明け、産休明けということで0歳児から預けている方が多い。そういった中で子育てについて、いろいろな悩みとか相談するとか、どういう風に育てていったらいいかわからないという方もたくさんいるので、保育園なんかでは保健師さんと相談しながら、出前講義をして頂いたりとか、若いお母さんたちに安心して子育てできるようにしているがもう少し、参加できるようになればよい。

私は高野地区だが高野にはわりとアパートに入られていてもそのまま住宅を建てられて住まわれる方が多く、近年、保育園で定員割れのところも有るが、高野地区の方は少し増えてきている。これから先は、さきほどの統計の中では全体では減ってくるということがあったが、病院が近かったり、大型スーパーあったりという事で住みやすい地域なのかなと思っている。そういったことも若い世代の方は求めていると思う。スマホや携帯電話で情報を得る方が多かたりするので、そういった事もこれからの津山市の中で発信の面でも必要ではないかと思う。他の委員も言われたようにのびのびと元気に育つということになると、公園も行ける場所も無かったするので、そのような環境もどんどん検討頂けたらと思う。

会長： これからの総合戦略の中で指標というかKPIに入れてもらえればよい項目も意見の中から出たと思う。現場からの御意見というのは指標としてとらえやすいところでもあるので、ぜひ検討いただきたい。

事務局： まず、ひとり親家庭での児童クラブ等への誘導のしやすさということだが、津山市では、言われているように助成制度は創設していない。ひとり親家庭の方に対してアンケート等を実施し、そういった意見を聞いており、津山市では県への要望等を行っている状況。今後についても、アンケート等の貴重な御意見を参考にしながら、今後の施策の方を検討していきたい。

子育て相談につきましては、保育園の方もそうだが、市では支援センターや子育て相談の拠点施設を持っているので、そういった場所を利用して施策を行っている状況。

会長： 発言された委員の方で何かありますか。社会福祉関係の方や子育て関係の方の意見、委員の方の発言が少ないので、非常に重要な分野だと思う。子供がいないと津山市は成り立たないので戦略的に何かあればどうぞ。

委員： 「マズローの欲求段階」だがここは、ものすごく重要なところで、子供だけではなく私たち大人も同じ。

自己実現に向かっていくという子供の意欲の課題というのはすごく大きいかなと思う。そしてさらに、これを実現させるのにとっても効果的って言われていることは、年齢層の幅広い関係性で育っていくというように言われている。他の委員さんの方からも出ていたが、地域の中での活動行事等々が、今、コロナ禍で消えているが、子供たちが参加する大人たちと一緒に遊ぶのも大事だが、いろいろな経験・体験こういったものが増えていくことによって、子供の社会の体験が広がり、自己実

現に繋がっていくと思う。そして、自分は、将来、どういった像を描きたいかっていう大人像であったり、青年に向けての青年像であったり、そういったモデルが子供にとってすごく有効と思う。

今、子供たちは、スマホとかテレビゲームとか様々なバーチャルの世界の中で生きようとしている子たちがたくさんいて、確かにそちらの方から出る企業の目指すものも沢山あるが、実際は、子供の体は、今、危機的な状態になっていて、眠れない子供たちが増えている。特に、3才までの子供の睡眠不足は、ワースト1、2と日本は言われている。それはなぜかという、スマホとかそういった光がたくさん夜になってもある。完全な暗闇の中で子供は生活できないから、メラトニンが出ていくことができなくなっている。そういったメラトニンが出ないということは、夜が眠れなくて、深い睡眠が取れないということは朝が起きられなく不登校とか、鬱とかになる。子供から鬱がでるといえるのは、私の子供時代から考えられないような話だが、そういった症状が実際に出てきている。

津山市の中の子供たちがどういうふうな身体で育っているのか、生活しているのか、こういったのも調査しながら研究していただきたい。そこは大人の協力もたくさんないといけないし、それから、ネット犯罪とか様々なことに広がっていくことを思うとネットリテラシーの学びの場も必要と考える。

この時代なので、子供が小学校でiPadやそういった物を使って学びの経験を活かしていかなければならない時代だが、どのように子供に与えていくかということも大人が考えていかないと取り返しのつかない子供たちを育てていくのではないかという不安を感じている。

リアルな体験をたくさん、先ほど出た外遊びなどもリアルな環境がたくさん出るような、そういったことを大人たちがいつも検討して頂きたい。

日体大の野井先生なんかは、ものすごくたくさんの資料で研究されている中で、学校の6時間の中でも、窓側で生活する子と廊下側で生活する子だけでもメラトニンが出る量もかなり違うという数値も出している。世界的に注目を浴びるような数値が出ているようなので、津山の子供たちも健康な子供たちが育っていくよう願う。

会長： 調査もいろいろされていると思うがアンケートだけでなくアンケートもかなり深掘したアンケートが必要だと思うが、それを補完する意味でもヒアリングで現場の意見を聞いていくと言うのは非常に大事と思う。他にみなさんの御意見御質問はないでしょうか。

事務局： 今日の報告の中でも、移住者が増えているところというのが、非常に大きい(専門委員)注目できる場所だと思う。

この数字が全国で比較できないので、実は全国的な傾向はもっとポジティブなのか、津山が遅れているのか、全国と比べても津山は進んでいるのかというところは、厳密には難しいかと思うが、ただ絶対数として津山は非常に増える傾向と思う。その際に、他の委員が言われたように、来てる方がどういう理由でここに来られたのかとか、なかなか数字に表れない部分や思いなど聞き取り要因分析を行うと良いと思う。

津山市は、子育てが充実しているし、教育も充実しているし、私は教育に関わ

っているが、進んだところがかかなりある。でもそれが伝わっていないという課題もある。ぜひ情報発信して要因分析をして積極的に対象となるところに発信していく。できればマーケティング広報をやって頂けると、いっそう津山市の良さが伝わっていくと思う。結果的に移住者が増えていくという好循環が生まれるといい。

委員： 林業のK P Iの指標だが、従事者を指標としていることがいいのかどうか論議されたことがあるか。林業を取り巻く環境はずいぶん変わっている。作業環境も変わっており、需要の面でもずいぶん変わってきている。この指標をこれで見っていくというのは果たしていいのか疑問に感じた。

人口動態のことで社人研の推計の説明があったんですけど、それは何か意味があるのかそのあたりについて教えて頂きたい。

それともう一つ、これは要望になるが、津山市に対する要望と申し上げたら筋違いとなるが、若者の定住だとか18才の崖というようなことが書かれているが、美作大学には社会福祉学科があり、そこに結構、地元の進学者がいる。私どもの傾向として、地元の進学者はだいたい地元就職する人が多い。

うちの教員によるとうちの卒業生は津山市内の社会福祉施設になかなか進めれない。最近大きなニュースがあったと思うが、そのような状況が結構長く続いており、それはゆゆしき問題だと思っている。岡山県あるいは津山市、社会全体でそのあたりを変えていかないと、せっかく優秀な学生を輩出しても、その学生が津山市内に残れないというような現状が実際あるので、そのあたりの施策を講じていかないといけないと思う。

会長： 御意見・御質問をあげて頂いた。事務局で何かあるか。

事務局： 林業従事者数が、林業の指標になるのかとのことだが、従事者の推移については、取り組み状況に記載している通りとなっている。林業従事者の確保、育成に取り組むということで援林塾であるとか林業就業相談会ということの実施を目標にしている。林業というのはなかなかなじめない、農業は近くにあるが、林業の場合は実際に仕事を見たことがなかったり、どういったことをするのか把握できない部分がある。子供の頃からそのような経験して頂くことを目標として、従事者の推移を上げさせている。把握が難しくこの数字については農林業センサスの数字を使っているんで、来年あたりにこの数字が動いてくると考える。

また、林業につきましてこの指標だけではなく、その他の指標もいくつかある。美作産材の性能表示の促進による価値の向上であるとか、地域材での家作り事業の推進であるとか、市有林の活用促進そういった所にもK P Iを設けて指標としており、この辺りを複合的に考えている。

事務局： 社人研との人口推計の比較という話ですが、津山市の状況におきましては、2015年に行われております社会人口問題研究所の推計、それから津山市が独自にやっている将来展望人口、このような比較の中で推移を図っている。

本日、2020年の状況について実績を報告しているが、国が行った社人研の推計と本市独自の人口推計との位置関係で社人研の数値よりも若干低めであると

いうことを報告した。

それから、美作大学の卒業生で地元からの進学されている方の就職について、学部構成については、津山地域のエッセンシャルワークを担って頂く人材をたくさん輩出されている。圏域でもこういった美作大学での機能に注目、期待されている。本市においては、今年度から、高等教育機関連携室というものを設置しており、こういった連携を強める中で検討してる。

会 長：今からちょうど25年前、その時を契機にして津山はかなりガラッと変わったと思う。非常に厳しい立場にあるという感じる。

なぜかというと、作陽音大が倉敷に行ってしまった。そこからこれまでの町づくりが変わって、それまでは音楽都市で作り上げてきた。それで中国自動車道が通って企業立地も進んで人口がそこをピークに下がった。そこが大きなターニングポイントになっている。音楽都市としてイタリアとかと提携してやっていた。次に変わるものをするのか、あるいは、倉敷の音楽学科と連携をすとか、あるいは美作大学に音楽部を作ってもらうか、あるいは逆に、今の時代に合った福祉関係、子ども関係で充実して町づくりをやっていくのか。そこが非常に大きなポイントと思っている。ただ、工業の方は、ステンレス関係のクラスターがだいぶ進んできて、出荷額が上がってきている。

玉野も同じで昭和63年に連絡船がなくなり、それから様々な事業を行ったが、結局、三井造船が撤退した。玉野もかなり厳しいが、近くにまだ岡山市がある。

津山も目玉をどこに持っていくかそこが一番重要と思う。音楽というか芸術というのには人を呼び込むための一つの目玉。それをもっと連携を広げていく方法やあるいは地元就職する福祉関係、こどもの福祉関係は美作大学がある。大学などと連携していい子供に育てていくような津山市になる。これからは絶対に超高齢化社会となり、今の20代・30代は100くらいまで生きる時代になり、平均寿命はもっと延びてくる。そういった時代になると、健康な人がどれだけ多いかというのは町の活力の源泉になってくると思う。

そういった中で移住者が増えているというのは、全国的に増えているところもあるがどういった要因で来ているのかしっかり分析することが重要。分析というのは、ヒアリングで調べて例えば、都会で離婚して地元に戻ってきたとかいろんな理由がある。他と比べて津山の方が良かったとかここが一番大事。

もう一つは、津山を候補地として考えたとき、移住者センターに聞いたらわかる。県を通じて調べてもらえば良い。大目標のあらゆる施策をおこして人口減少・少子化を食い止め、人口構造の若返りを図り、まちの活力を創出するというのは、やはり達成されてない。そこは各事業の達成具合をいろんな角度から徹底的に分析をしてやっていくしかない。観光面とかいろんなところから調べていかないといけないと思う。

委 員： 私は、7年前に東京からUターンしてきたという立場で、なぜ帰ってきたかということ考えた。まず、津山は安全だということ。東京から、3.11のあと東京近郊から移住して来られた方もおられが、あの時の東京の緊張状態というのは異常だった。津山の魅力のもう一つは、田舎に帰りたいという故郷回帰の動きも2000年代の前半からあったが、そこそこ都会的な都市生活も営めて、自然も身近にあり安全だというのは、魅力的だと思っている。



私が、大学から東京に行って帰ってこなかった理由は、自分の専門性を高める研修機会が無かった。本市も美作大学を擁しており、福祉学科と教育学科もあり教員養成もしている。さきほど会長が言われた教育・福祉の町ということで、保健医療もある。医療の面でも充実している所だと思うので、そこを活かせば、かなりの多くの移住者が魅力を感じると思う。規模的にもちょうどよい都市環境というか地域であると思う。私としては、自分の専門である心理臨床の世界のスペシャリストを養成するに当たっても、ここにそういうセンター機能があれば、呼び込みたいと思う。ヒューマンサービス、心理臨床士の専門家や福祉の専門家になるのであれば、津山に来たら良いと言われるくらいになれば、人を呼び込めると思う。

もう一つ言えば、本市は、朝日茂さんという福祉のいわゆる文化的で健康的な最低限な生活という問題提起をされた裁判が始まった町。これを逆手にとれば、いかに福祉について感度が高く、充実した支援が受けれるかということが売りになると思う。

ヒューマンサービススペシャリストの町、安全で自然豊かな町、都市生活とカントリーライフをともに楽しめる町みたいなチャッチフレーズで売れば良いと思う。安全であれば、情報の集積センターを持つてくることができれば良いと思う。

会長： 個人的には、空洞化した中心部に美作大学のオフィスをもってきてもらい、そこで社会人再教育やスペシャリストを教育できるような場所があればいいと思う。中心部というのは空洞化しても一番人が集まりやすいところ。復活するには十分ポテンシャルはあると思っており、思い切って美作大学を中心部に移転することなど考えられる。

委員： 実は、大学移転は非常に難しいが、この12月にサテライトを商店街に出す予定。そこでは、相談業務もやっていきたいと思っており、サテライトの内容は決まっていないが、少しでも中心部ににぎわいとか創出できれば良いと思っている。

会長： 議題の項目にその他という項目がございますが、皆様から何かございませんでしたら、連絡事項何かございませんか。はい、どうぞ。市長。

(市長)： 貴重な御意見ありがとうございました。青少年育成センターが機能していない点について、私も大変重要だと思っている。私が就任し、青少年育成センターを設置し、取り組みをしてきた。しかしながら、取り組みしているが機能していないとのことで、今後しっかりと連携を図りながら対応していきたい。

それから正職がしっかりと専門性を高めて、市民相談等の対応するようというお話もあった。たとえ非常勤であっても、消費生活アドバイザーのライセンスをお持ちの方は、ずっと常勤という形ではありませんが、非常勤という形で専門性を持って対応して頂く。DVのお話もあったが、DVにつきましては、岡山県と共同で圏域の1市5町のDVセンターを立ち上げ、市役所ではないがそういったところで対応している。十分ではないが相談業務については取り組みを強化を

していきたいと思っている。

子どもの貧困の問題については、大変重要な課題になっている。貧困は、様々な取り組み方があり、学童については先程お答えした通りとなる。学習環境を改善するということも、スタートしている。

また、人口減少とくに社会的現象に伴う社会減のご意見を頂き、他の委員からも移住等のお話があった。最近津山市が移住先として、脚光を浴びるとまでは言わないが、非常に関心を高めて頂いている。その結果が数字に表れているようだ。

これからはどういう都市像をもって移住者にアピールをしていくかが重要である。私は、移住フェアに行って便利な街暮らしができるということと、のどかな田舎暮らしも両方快適で対応できる町ですよということを申し上げている。どちらも都市機能としてはブラッシュアップしていきたい。

私としては、会長が玉野市や様々な例示をあげられた。私も音楽の似合う町ということで市民活動とかやっていたが、この町が拠点都市、玉野市とは少し違うのかなあという思いを持っている。拠点都市というのは、ある程度のものが一様に揃っているという都市機能が必要で便利な街暮らしができることになると思う。

それだけではなく、基礎自治体であるため快適性を高めて、住みやすさや暮らしやすさということが必要であると考えている。

そういった観点で暮らしやすい町づくりを続けて参りたいと思う。本日頂いた意見を参考に今後の町づくりに活かしていきたいと思う。

最後、K P Iに追加してくという課題が何点か出たので、ご指導頂きながらその辺りをしっかり活かした形にしていきたいと思う。

会 長： それでは、最後に副会長から一言お願いします。

## 7 閉会

(副会長)

非常に多様な意見を委員の皆様の方から頂いたと思う。市長のお話にもあったが、県北において津山は、拠点都市ということでそこに対する期待の表れとして、皆様に受け取っていただき、本日のご意見を更に活かしながら総合戦略が着実に実を結んでいくようにしたいと思う。

以上